

シナリオ 7

避難所開設直後



【場面設定】

京子は、想像を絶するような被害が発生している中、ようやく避難所である小学校にたどり着くことができた。

校門を抜け、まず目に飛び込んできたのは、人、人、人・・・

多くの人で学校のグラウンドが埋めつくされていた。

そこには、怪我をしているのか、泣き喚く子供をあやしている母親や、一人で何をしたらいいのか困惑している様子の老人、親とはぐれた子供などもいて混沌とした状態だ。

京子もようやく避難所に着いたのに、まず何をしたいのか分からず校門付近で立ち尽くしていた。

少し時間が経ち、落ち着いてまわりを見渡すと、体育館の入口付近で人だかりが出来ているのが見えた。

何かしている様子なので、他の人と同様に近

づいてみると、どうやらそこでは避難者の受付をしているようであった。京子も受付をするため、列に加わることにした。

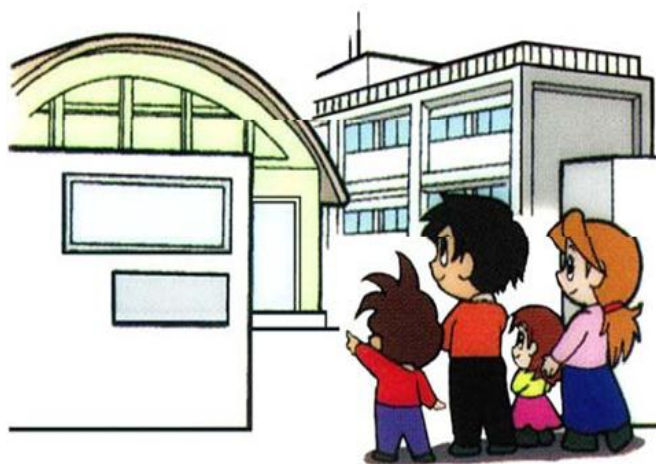
受付では、まだ連絡がとれていないが、自分と娘の恵美の名前も書いた。

ようやく受付を済ませ、体育館に入ったが既に体育館の中は満員の状態であった。

避難者の様子を見渡すと、着の身着のままで避難した様子の人や、家からリュックに食べ物や飲み物などを詰め込んで来ている人もあった。

その様子を見て、自分は何も持って来ていない事に気づいた。

そういえば、先ほど青木さんに食べ物のことを言われたはずなのに、やはり、動揺していたのか、頭に入っていなかったのだ。



こんな状況で大丈夫だろうかと、京子は、今後のことに少し不安を覚えた。

とりあえず門の外につないでいるリリーのことも心配だ。

学校には何もなさそうだし、市からの応援も街の被害状況から当分届きそうもない。一旦家に
戻り何か取りに行こうかと迷っているとき、グラグラと揺れが襲って来た。

「余震だ」と感じたと同時に、キャーという悲鳴が体育館に鳴り響いた。揺れは直ぐにおさまっ
たが、心臓のドキドキ感はなかなかおさまらない。

とにかくリリーのところに戻ろう。リリーといっしょにいれば、少しは不安もやわらげると思
った。

歩き出した京子に、隣家の主婦のゆかりの姿が目にはいった。心細かった京子だが、ほっとし
た気分でゆかりのところに駆け寄っていった。

【議論のポイント】

- ・自分が、主人公（京子）になったつもりで、状況をイメージし、その行動で起こりうることや
気をつけるべきことを考えてみましょう。

シナリオ 7 続編

避難所開設直後

【行動シミュレーション】



ゆかりも不安であったのか、京子
に気づくとほっとした様子で近づ
いて来て、お互いの手を取りあい、
無事であったことを喜びあった。

ゆかりは、地震発生時に足に怪我
をしたが、一時避難場所まで無我夢
中で歩いたこと。そして、寝たきり
の義母のつた子の避難を自治会の

人に手伝ってもらい何とか避難所にたどりついたことを話した。

家族とは京子と同様に連絡が取れていない
とのことだ。

京子も、何も持たずに避難所に来たことに不
安を覚えどうしようか迷っていたことをゆか

りに話すと、ゆかりも何も持ってきていなかったため一緒に様子を見ながら一旦家に帰ることに

避難する際は、非常持ち出し品や食糧
を持って避難しましょう。

した。

二人で学校を出て、少し歩いたところで、隣保長の青木さんに出会った。

「どちらへ行かれるのですか。」「手ぶらで来てしまったので家に食べ物や身の回りの品を取りに帰るところです。」

「いや、今はやめたほうがいい。あちこちで、ガスの匂いが漂っているし、いつ火災や爆発が起こるかわからない状況です。帰るのは1～2日様子を見てからにしましょう。」

避難所から自宅へ戻るのは、安全が確認できてからにしましょう。

そんな状況では仕方がない、二人は学校に戻ることにした。

リリーも一緒に体育館に入れたかったが、ペットは生活スペースには入れてはいけないと言われたので「リリー、おとなしくしててね。」と運動場の遊具に他のペットと同様につないでおくことにした。

体育館では、既に足が伸ばせないほど混雑している。

段ボールを体育館の床に敷き、暗幕やカーテンを寝具代わりにして暖をとっている人もいる。寒かった体育館に自治会長と教頭先生により、学校にあった石油ストーブ14台が運ばれてきた。

また、停電で真っ暗になっていた体育館やトイレ、廊下にくらかの懐中電灯が配置されていた。

火の元の取扱いは、気をつけましょう。

電話、携帯電話も不通となり、外部との情報伝達手段がなくなり、ラジオについても、もともと電波の弱い地域であったため、校内ではほとんど聞くことができなかった。

一体どういった状況であるのか把握しにくかったが、他の避難者の方から山崎断層が震源の地震であるという情報や駅前でも大変な被害が発生し、電車も不通となっているということを聞くことが出来た。

恵美は大丈夫だろうか、神戸に友達と遊びに行くといっていたが、神戸の被害はどうだったのだろうか、情報が入らないため不安がつのるばかりだ。

すでに、深夜2時を過ぎただろうか、体育館の中では余震が続く中、なんともいえない緊張感や不安感が漂っており到底眠れる状況でも気分でもなかったため、少し外に出ることにした。外では暖をとるためどこから薪を持ってきたのか数か所でたき火がされて人が集まっていた。

街は電気がないため暗かったが、火災の炎と煙、不気味な赤色の空が目に入った。消防車のサイレン音が鳴り響いていた。

またしても、なんとも言えない不安で胸が一杯になり、遊具の所へ行って、寒そうにしていたリリーを抱きしめた。

そうすると、少しは落ち着くことができた。やはり、この子とは、離れることができない。

そうだ、もし恵美が帰ってきたら自分がここにいることも知らないので困るかも知れない、朝になったらこっそり家に戻り恵美を待つか書置を残すことを決め、体育館へ戻った。

どうしても自宅へ戻りたいときは、必ず役員の方に申し出て下さい。